

書くことのパラダイム(見方の枠組み)を変え、 新たな実践の展開を

東京都八王子市立城山中学校

吉田 和夫

一 書くことの日常化のための方策

立場を変えながらも長く国語教育に携わっている、教室で実際に教えていることと、社会にとって必要な「実学としての国語」との違いに多少いらだつことがある。

この稿では「書くこと」に視点を当て、現在行なわれている指導のパラダイム(見方の枠組み)を少し変えてみるとどうなるか、改めて検討してみたい。(すでにやっているよ)とおっしゃる方は、項目を見て選んでお読みいただきたい。)

① 時系列で書く

前回の「ことばの学び」⁽¹⁾でもあったように、小学校から高校に到るまで、教師は「時系列で書くこと」を嫌う傾向がある。というより、その意義を感じていないし、ともに教えてもいないと思うのである。しかし、実

際の社会では例えば「事故報告」など「時系列」で書くことを求められることが多い。したがって、「時系列」で「なるべく具体的に詳しく」記述することをもう少し指導したい。時系列で記述した後、「残すもの捨てるもの」を決め、強調する部分をより工夫して書くように(編集することを)指導する。最初に書く時系列の作文は、提出する作品の「種」や「素材」であると考え、それらをもっと大事にしたい。

② 速くたくさん書く

教室の作文指導で、比較的軽視されていてしかも日常生活で最も重要なことは「速く書く」ことである。きれいな字でなくてもよいし、丁寧に書かなくてもよい、また、漢字を使わなくてもよいから、とにかく「速くたくさん書くこと」をもう少し指導する必要がある。

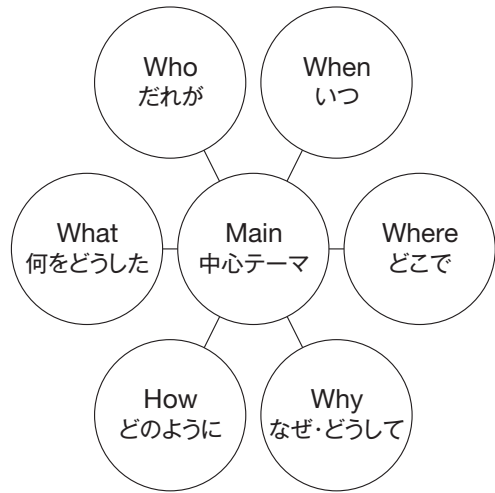
聞いたことをできるだけそのまま書くなど、速記的な技能が必要ではないか、あるいは、コンピュータを用いても良いのではないかなど、いろいろ議論はあると思うが、とにかく人の話すことや授業の内容を(自分が分かるように)速く書く訓練(練習)が必要である。

私は、授業の中で「なるべく速くたくさん書くこと」を追求する時間を設定していた。例えば、十分間でできるだけ多く書くことを求め、長く書いた生徒を褒めるというものがある。(何を書くのか、どう書くのかなど、内容については後述する。)また、一定の内容をできるだけ聞き取り、書き取ることの練習もした。なじんでいる国語教師の話だけでなく、既存の学習材や聞き取り課題を用いることも検討したい。⁽²⁾

③ メモをとる

我々の日常生活では、内容について「適切なメモをとる」ことが求められる。しかし、音声言語の指導では用いられるが、他の領域ではこれを十分指導していないようである。話を聞きながら、あるいは教材を読みながらメモをとるには一定の技能が必要だが、何をするのようにとればいいのか国語の時間にきちんと教えているだろうか。例えば、次のペー

ジで示すようなウェップ(マッピング)を用



いるとよいのではないか。

なお、中央部のメインテーマは見出しでもあるので、最後に書かせるのもよいだろう。メモの取り方は各自が工夫するとよいのだが、分かりやすく整理されたメモをどのようにとるか、相互に話し合ったり様式を工夫したりすることも国語の時間に指導したい。

④ 記号を使う

「作文で記号を使うなんて」と言われるかもしれないが、例えば校正のための記号もある。メモをとる際に、自分だけ分かる記号なども役に立つことを指導したい。○△□※◎やA・Q・P・&などの他に←や@、||や÷#≡など数記号の使用も教えるとよい。生徒は

おもしろがり、自分なりの記号を工夫する。

⑤ コンピュータを使う

ワープロソフトを用いて作文することもぜひ教えたい。もし、キーボードのブラインドタッチができるようになれば、書くよりも数倍速く、思考の流れと同じようにメモしたり記述したりすることができる。これは一生の財産である。また、正確な漢字が分からなくても文章が書けることも「メリット」である。

国語科の教師はそれを「デメリット」であると言いかもしれないが、実際、特別支援学級で実践し、これで文章が書けるようになった生徒が多くなった。アメリカの国語教育では、下書きはノートやメモパッドで行い、実際の提出作文はコンピュータを用いることが多い。スペルチェックどころか、スペルの自動修正もできる。目的のための道具である。

⑥ 内容を考える

「先生は作文を書けと言うが、何を書けばいいか分からない。」とよく生徒に言われる。書くためには内容が必要であり、その内容を発想するための「枠組み」も必要である。例えば、下のようなテーマで今日の出来事や昨日の経験、自分のことなどを書かせてみてはどうだろうか。これらの「パーツ」を選んで書き、後で組み合わせることである。詩や韻文を書くこともこれで指導できるだろう。

内容を考えるための枠組み(例)

- A 出来事(時系列)
 - B 出会い(5W1H)
 - C 会話(ダイアログ)
 - D 気持ち(喜怒哀楽)
 - E 見たこと(情景・風景・状況)
 - F 聞いたこと(知識・反応・感想)
 - G 天気・雰囲気(情景や心情)
 - H 夢・希望・将来(5年後)
- (やりたいこと、なりたいもの、未来の姿、かなえたい夢など)

⑦ ペアで考える

作文は一人で書くものと思っている教師や生徒が多いが、二人一組で作文を書くことを経験させてみると発想が変わる。

ペア作文のプロセス(例)

- A 最初の三分で何を書くかを決める。
- I 次に、三分でそれを友人に紹介する。
- U その後、友人からコメントや意見をもらった後、内容について話し合ったりする。
- 工 最後に、四分でもう一度作文を書く。

これを二回繰り返すと、だれでも一定の作文ができる。もちろん、途中でテーマを変え

たり、内容を変えたりすることも可能である。

⑧ グループで考える作文
 何かについての意見を作文にするにはグループ（四人がベスト）で作文を検討することが有効である。この場合、その話題について、右の図のように良い点（長所）、悪い点（短所）、課題（取り組むべきこと）、可能性（夢や希望、あるべき姿）など分担を決めて出合う。

良い点（長所）	悪い点（短所）
可能性（希望）	課題（取り組み）

ディベート的な内容、両義的な内容がテーマとして最適である。（例えば、「電車の優先席は必要か」「学校は大きい方がよいか」など）この話し合いを基に、その後自分の意見や考

えを書く。

二 対象化とトランスメディアーション

① 対象化するという行為

「書くこと」とは認識を対象化してとらえることである。つまり、自分の見聞きしたこと、経験したこと、考えや感情を「対象」としてとらえそれを他者に示すことに他ならない。このようなことから、自分の思考や感情を生み出す他の媒介物（メディア）について、文章化するという方法がある。これをトランスメディアーション（媒介物の交換）と言うが、次のような取り組みが可能である。

② 絵から文章へ

絵画や彫刻などに伴う情景や感情、作者の思いなどを可能な限り文章化する。作品世界の具体物や人物の姿を文章にしてもよいし、批評や感想でもよい。自分の受け取ったイメージや感性を大切にして文章や詩を書く。

③ 音楽から文章へ

同じように音楽のモチーフやその世界を感じるままに文章化する。正しいとか間違っているとかのない世界なので、自由に記述できる。絵の場合もそうであるが、鑑賞文や詩歌に進化させることもできる。

④ 映画から文章へ

テレビドラマでも映画でも、ビデオでもよ

いが、それらの一部を文章化したり、会話を再現したりする。最も感動的な部分を取り出して書いたり、冒頭の情景を書いたりすると、その作品を紹介できる作文になる。これを互いに読み合ったり、発表し合ったりする。

三 日常の言語生活の対象化

① 会話から文章へ

学校や家庭での生活の会話をテープレコーダー（ボイスレコーダー）に録音し、それを再生してダイアログにする。授業で実践したが、面白くて夢中になる生徒もいた。その後、役割を決めているような場面での会話を創作し、作品化したり、実際に会話しては録音し直したりして、完成度の高い作品（戯曲のような台本）を生み出した生徒も現れた。

② 他の授業の振り返り

自分の好きな授業や印象に残った授業など、本日の授業を振り返り「学んだこと、疑問に思ったこと、役立ちそうなこと、授業の意見や感想」などを「国語のノート」に書く。また、次ページのようなワークシートにしてもよい。これは他の教科との連携にもつながり、国語の授業だけでは分からない生徒の実態も把握できる。実際、職員室の話題にもなった。

今日の授業の振り返り

月 日 校時 教科 ()

学んだこと (箇条書きも可)

- ・
- ・
- ・
- 疑問に思ったこと
- ・
- ・
- 役立ちそうなこと
- ・
- ・
- 意見・感想

③ ノートの可能性「作品としてのノート」

教員になった当初「国語のノートはきれいに書くもの」と指導してきた。しかし、黒板をいかに丁寧に写してもその生徒の成長にはあまり役立たないことが分かった。そこで、前述のような多様な作文を日常的に国語ノートに書くことを啓発し、何でも書くノート、下書きが残るノート、作品までのプロセスが分かるノートを指導するようにした。(ちょうど作家の下書きノートのように、制作のプロセスがすべて分かるノートを目標にした。) さらに、それらを通して自分の「進化」の跡が分かるような「個性的で雑多なノート」(生徒によっては見事にインデックスで分類しきれいなノートを作成したが。)を「作品としてのノート」と名付け、可能な限りそれらを見て、評価(啓発的・肯定的な評価)を記

入するようにした。また優れた「作品ノート」は許可を得て紹介し、全体のモデルにした。

④ 授業の中の十分間作文の実践

日常の中に「書くこと」を導入するには、国語の授業の中で「書くこと」を意図的・計画的に取り入れることが必要である。前記のようなノートづくりを単なる宿題にはしたくない。そこで、五十分の授業を十分×十五分のユニットに組み、その一つを作文の時間にする。そして、先に述べたように「なるべくたくさん速く書く」ことや話を聞いて再現できるメモをとることを指導する。また、次のような観点からじっくり書くことも教える。

- ア 光 (いろいろな光の状況を入れて)
- イ 音 (様々な音を作文の中に入れて含む)
- ウ 匂い (朝、雨の後、日中、夕方など)
- エ 味や触覚 (舌触りや手の感触など)
- オ ひらめきや連想、偶然の一致など

これら五感による観点を作文(詩や短歌・俳句でもよい)の中に入れて込むことで、⑥で紹介したような内容を再構築させることができる。また、お互いに読み合い、コメントを書くなどの時間も短時間設ける。(なるべ

く多くの生徒からコメントをもらう。)

⑤ 朝の十分作文の導入

朝読書をやっている学校は多いが、書くことを導入している学校はまだ少ない。しかし、一週間のうち一日十分程度、ひたすら書くことを行う時間があるとよい。「書くことの日常化」を授業で指導するとともに、今後、この朝作文を学校として積極的に導入してはどうだろうか。最初から学校全体で取り組むのではなく、やれるクラス・やれる学年から始めてほしい。

注

(1) 堀田龍也(二〇〇七年)「情報を編集する」ということ「三省堂」ことばの学び vol.14

P.23

(2) 高橋俊三・声とことばの会(二〇〇七年)

『中学校 国語科聞く力の評価と指導 すぐ使える評価テスト「CD付き」』明治図書

よしだ かずお 千葉県及び東京都の教員・指導主事として、新しい国語教育を模索してきました。現在、社会で役立つ実学としての国語を検討中です。